

横田カーター啓子



よこた・かーたー・けいこ

ミシガン大学大学院図書館・日本研究司書
1956年大阪市生まれ。津田塾大学卒業後、渡米。日本学術情報の収集・保存・共有基盤充実整備と、国際協力に取り組む。論文に「人文学系ライブラリアンのキャリアパス」（『情報技術と科学』2019）、「知の創造基盤としての図書館」（『図書館雑誌』2016）など。

米国のミシガン大学のIITシフト 遅れる日本の学術基盤強化

春の陽光が美しい五月二日、私が勤める米国ミシガン大学の卒業式が、史上初めてホームページ上で挙行された。本来なら卒業生、その友人や家族、数万人の歓声が大学スタジアムに響き、大学のあつた町も活気に沸くはずだった。

オンライン卒業式では総長、学部長、運動部コーチを始めとして、貴賓のゴア元副大統領、同窓生で劇作家のドミニク・モリッソ、各界で活躍する同窓生が遠隔地から祝辞を寄せ、学部卒業生から集めた四年間の写真動画が流れ、ブラスバンド、合唱、チャリダーも動画で参加し、親密感に溢れていた。公衆衛生学部長は「全員が公共の安全を守るために未

曾有の状況を素早く理解し、忍耐強く協力したことは公衆衛生特別単位に値する」と賞賛し、「四年間に得た知識、スキル、困難にも柔軟に対応した力を、これからの予期できない挑戦に生かし、正義、友情にもとづく持続可能な、コロナ後の新しい社会のシステム作りを担ってほしい」と学生らに誇りと励ましに満ちた祝福を贈った。

これらの賞賛は今の世界に生きる人すべてに向けられるものでもある。人々は、突然、乱気流の中で生命を守りながら、未曾有の事態を理解し、新しいスキルも学び、心身共に適応しながら、何とか困難を乗り越えている。

二十年かけた大学改革

卒業式二カ月前の三月、アジア系学生が直面したのは、中国発生の新型コロナウイルス感染を恐れた人々の、アジア系住民への偏見と暴力だった。マスクをすると「ウイルス！」と襲われかねない状況で感染から命を守りながら、生活の急変を生き抜いてきた。学生たちを守るため、いち早く臨時休講した先生もいた。ミシガン州知事から在宅命令が出され、ミシガン大学でも大学病院を除く全ての施設を閉鎖し、在宅勤務と遠隔授業に移行した。八万人近い教職員・学生が、組



ミシガン大学大学院図書館の外観＝横田カター啓子撮影

織的に大きな混乱もなくスムーズに激変に対応できたことに、私は驚いた。それを可能にしたのは、大学の組織化された堅固な学術基盤整備、明確な情報公開、コミュニケーションだろうと思う。

二十一世紀からこの先の大学の存続と発展に不可欠な情報技術基盤整備は、ハード面だけでなく、専属ITスペシャリスト増員の投資にもみられ、職員の業務も刷新、補佐され、着々と、世界規模の研究と教育を支える環境が強化整備されてきた。この二十数年間の大学改革を、私も司書として経験してきた。教育内容

も図書館サービスも変化し、基盤を支える人材も長期にわたり養成され、急な対応療法ではないのである。

コロナ禍対策第一段階は切り抜けたが、これからの展開は予想し難いが、もう、元には戻れない。方法を探り、新たな社会を切り開いていくしかない。

五月、大学でも歴史図書館が「記録プロジェクト」を立ち上げた。長期戦の中で、癒やされ、先のことを考え、他者を無意味に攻撃しないためにも、これまでの体験と記憶を記録する。経験を共有し、共同体として連帯感を持つことは、力を得るため、社会の安全のためにも必要だろう。図書館には、その大学と州の人々の歴史を記録・保存し共有する義務と責任がある。誰でもミシガンで起こったことの写真、授業計画等、多様な経験と資料を投稿することができる。世界中の人が次の世代のために記録を残すべきだろう。ミシガン大学で経験したことを、改めて報告したい。

迫り来る新型コロナウイルス

一月。中国武漢で発生した新型コロナウイルス

が世界的パンデミックになり、米国も襲われるとは思っていなかった。欧州の感染拡大や、日本のクルーズ船での多国籍の乗客感染は大ニュースになったのに、これまでアジア、アフリカでの大規模感染は、米国ではどこか「他人事」だったと、心が痛んだ。これまで米国本土で感染拡大がなかったのは偶然だったのでなく、国家安全保障対策で防止されていたこと、連日ニュースで名前を聞くことになる米疾病予防管理センター(CDC)や医学研究へのトランプ政権下での予算削減が、米国での感染拡大の一つの原因になったことを知る。

二月下旬。ミシガン大学の学生は一週間の春休みに入っていた。米国の大学の春休みは、フロリダ、メキシコなどへ海外旅行する学生が多く、羽目を外す濃厚接触の代名詞のようなものだ。その学生たちが、長時間の密室フライトで大学に戻ってくる。教職員は戦々恐々とし、すでに総長室は「起こるであろうこと」を想定して準備に入っていた。

同月二十九日。米ワシントン州シアトル郊外のカークランド市で、初めて新型コロナウイルスの死者が発表された。まだ、ミシガン州では罹患者はゼロであった。

三月五日。ボストンで予定されていたアジア学研究・東アジア図書館協議会年次会議がキャンセルされた。この頃から会議や講演が、全米各地で次々とキャンセルされ始める。航空会社は、すでに国際線に加えて、国内線もベナルティ無返金を始めた。米国は産業・学術研究の世界的中心であるために、数百人規模の国際会議が多く開催される。会議場付き大型ホテルは各地にあり、会議ビジネスはドル箱で損益は大きい。予想していたもののキャンセルになると、徐々にコロナ危機が身近に迫ってくるようであった。

同月六日。ミシガン大学では、五万人近くの学生が大学寮や近辺のアパートに住んでいる。教職員、大学病院関係者と病院訪問者を加えると十万人近い人が小さな街で活動している。学生が春休みから帰ってくる週末前に、総長から全学メールが送られた。大学は新型コロナウイルス対策についての情報を用意し、海外への渡航自粛（後日、国内も含めて禁止）、海外からの帰国者には二週間の自己隔離を求め、そのために居場所の必要な学生は援助するなど、健康と安全管理のためのガイドラインが出された。外国に留学中の学生は召還し、職員には生命第一とし



キャンパスの広場に新型コロナウイルスの死者を悼む半旗が掲げられた＝横田カーター啓子撮影

て自己判断での在宅勤務を奨励した。同月九日。すでに死亡者が出ていたシアトルにあるワシントン大学が対面授業を中止し、遠隔授業を始めた。

同月十日。罹患者が急増していた西部では、カリフォルニア大学バークレー校が遠隔授業開始。東部のハーバード大学など、この頃から春休みに入る大学は、学生に春休み後、キャンパスに戻らないように要請し、学期終了の五月末まで遠隔授業に入ることを決めた。

ミシガン大学には、まだ日本から訪問客があつた。国際線はなんとか欠航せず、

国立民族学博物館の広瀬浩二郎准教授が無事に来られた。視覚障害を含むすべての人がデジタル情報にアクセスできるようにするにはどうしたらいいか、電子情報のインターフェイス整備や図書館サービスの専門家と話していただいた。

同月十一日。博物館学専攻の学生が、広瀬准教授が提唱されている「手でさわる展示」というユニバーサルミュージアムの講義を受けた。「手でさわる作法と技法を学び、展示物の背後にある、それを創った手、使っている手、伝えた手という、直接目に見えない物語を想像・創造するのが、さわる展示の要諦」という。すでに感染防止のために接触禁止、手洗いが喚起されていたので、学生からの質問も「触れること」に集中。これが最後の対面授業になってしまった。

この後、総長から全員メールが届いた。対面授業は中止。学生は寮か下宿待機、寮と食堂は開館するが帰省を強く奨励。教員が遠隔授業を準備するため、二日間休校になる。こうして大学関係者全員にとって怒涛の日々が始まった。

同月十二日。大学IT課によって遠隔授業を支えるサーバー容量増、サイバー安全強化など、昼夜を問わない作業が始

まる。図書館でも、遠隔利用が可能な図書館サービスと研究資料リストを準備。身障者にも配慮するように情報を流す。さらにIT技術に慣れない教授のためにサポートデスクを図書館内に設置して、司書が、大学が法人契約する会議ツールの指導をした。私も日本研究の教授たちに各種の緊急サービスを送信する。日本語オープンアクセス資料についてはすでにガイドがあり、主要な商業日本語データベースは遠隔利用が可能である。この時ほど予算が潤沢な図書館の恩恵を感じたことはない。

日本研究の学生は、博士課程院生を除いてほとんど英語資料を用いる。英語資料はフルテキストデータベースが各種契約されており、学生は遠隔利用にも慣れている。図書館に来ることなく課題をこなし卒業する学生も少なくない。後日図書館が行った調査では、人文系書籍は紙版しかないこともあり、図書館閉館で都合を感じた利用者はいたものの、資料利用についてあまり不満はなかった。

同月十六日。社会状況は日々急変し大学構内は不安に満ちていた。多くの大学の学長が動画を公開し始める。大学の対策とサポートを丁寧に説明し、「一人ひ

とりの行動が自分も全体も救う」と協力に感謝する。こんな時にこそ、動画とはいえ心のこもった肉声で直接語りかける素早いリーダーシップは見事で、一人ではないという安心感が生まれ、皆と協力して乗り切ろうと励まされた。

六週間の嵐の日々

ミシガン大では組織的には遠隔授業はスムーズに始まった。既に学生は「キャンパス」という学業管理クラウドシステムを使って、授業シラバス、資料へのリンク、成績、授業料、教授やクラスメートとの通信などを管理できる。数年前から大学は会議用ツール二社と法人契約している、大学関係者は誰でも利用できる。すでに会議ツールを用いて研究活動をし、業務していた人も多い。

それでも、実際に授業が始まるとサーバーはパンク。IT課はサーバー増強、ハッカー攻撃には安全強化等、昼夜を徹して維持管理し、ヘルプ相談に感じながら支え続けた。大学近辺に滞在した学生には、必要なら大学がPCを貸し、ラボを開放した。遠隔授業開始一週間後には、成績評価は暫定的に、パスか、コロナ時

無評価の二段階になると発表された。この「安心」のお陰で先生と学生は変化に対応し授業に集中できたと思う。

しかし、初めて遠隔授業に取り組み先生と学生は、最初の適応時から学期終了までの六週間は嵐の日々であった。二百七十人の二年生と九人の授業補佐の大学院生からなる大人数クラスを受け持ったA先生が体験を語ってくれた。

「最初の二週間、学生は突然、他州や外国に帰省し、大移動をしながら遠隔授業を受けることになったので、課題をなくした。遠隔授業をするにも時差があり、東部のミシガンからは西部は三時間、ハワイは六時間、そして昼夜反対の外国にも学生がいて、同時講義は無理。録画していつでも視聴可能にした。授業補佐の院生との議論クラスは週二回あり、グループ内で調整して会議ツールを使った。九〇%の学生は問題なく授業を終えたが、一〇%の学生にはたいへんな試練だった。帰省して街のインターネットサービスに通った学生もいた」「ある学生はスパーパーでアルバイトしてそこで新型コロナウイルスに罹患してしまった。親が新型コロナウイルスで亡くなった学生もいた。精神を病み、恐怖で外出できず食べ物がなく

なつて倒れ、SOSを送つてきた学生もいた」「通常なら、仕事の時間以外は学生との通信はしないが、困難な状況にある学生を助けるために、一日中連絡を確認し、学生を助けながら授業をした。皆がんばった。この学生たちは私の誇りだ」と称賛した。

同月十七日。大学病院を除いて大学はすべて閉鎖された。「午後三時に図書館閉鎖。全員退出」と連絡が来た時は、戦時に荷物をまとめて逃げる人たちのことが頭に浮かんだ。図書館は数年前からテレワークが奨励され、私の部署でも昨年在宅勤務をしてきたので助かった。それでも、全面的な在宅勤務には図書館専用サーバーへのアクセスが必要だ。とまどっている図書館IT課の職員が確認に来てくれた。家にインターネット回線のない場合は図書館が費用を払つてくれ、PCを大学から借りた職員もいる。こういったサポートがあつたからこそ全員が無事に在宅勤務に移行できた。

ところで、全米の大学で遠隔授業が始まつた頃に、欧米の電子データベース会社が取つた行動は素早く、際立っていた。次々と「期間限定コロナ禍の研究・教育支援」と称して、図書館がすでに契約し

ているデータベースは無制限アクセスに拡大、未契約資料は無料試用を提供してきた。多くの大学出版会も高価な医学系電子書籍や社会科学系電子書籍なども次々と無料提供し始めた。

この頃、日本では小中高校が一斉休校となり、主要な出版社が、自宅にいる子供向けに電子教材や児童向け書籍を期間限定無料公開するようになっていた。このレベルの電子書籍は、海外の日本語学習者に役立つのでリストを作成し、北米の日本研究司書で共有した。日本の電子書籍はライセンスが厳しく、日本国内で利用できても海外アクセスは不可能なことが多い。幸運にもこれらの児童向け電子書籍は海外からもアクセス可能で、日本語学習の学生に喜ばれた。

日本語資料の海外でのアクセス推進に従事している私にとって、欧米のデータベース会社の大学図書館支援は見逃せない動きであつた。これらの支援を例としてすぐに日本の電子書籍プラットフォーム会社であるK社とM社に提案した。「ここで何も支援しなければ日本は何もしなかつたという汚名だけが長期に残る。挽回には時間がかかる。緊急時の十の支援には万の感謝。いつも無視されがちな新

商品案内も無料試読提供すれば注目され宣伝効果大。そして、今、すぐ、動かなければ無意味」と説得した。功を奏して、か、いつもなら数年もかかる交渉なのに、なんと一週間ほどで返事があり、日本の主要新聞社データベース、辞書データベース、二社の電子書籍とさらに他社のデータベースの無料試用が北米と欧州で、期限付きで利用できるようになった。

電子化遅れる日本の学術資料

このことは、欧米の購入予算の少ない小・規模大学の研究者にとつては恵みである。日本の国立国会図書館と大学図書館からは、図書館間貸借で資料取り寄せは可能であるが不便だ。書籍の貸借は難しく、論文は複写を航空便で郵送。その航空便は現在停止中で、海外の図書館も閉鎖。日本の学術資料は電子資料が極めて少ないことは海外の日本研究に大打撃を与えている。この二カ月間に、どうしても必要な書籍の電子版を探してほしいという質問が司書グループメールで飛び交つたが、日本にはオープンアクセス、有料資料ともに、電子学術情報があまりにも少なすぎる。日本では、最大の電子

書籍を有する国会図書館デジタル書籍は著作権下の書籍が館内閲覧・国内図書館内閲覧のみで、図書館閉館の場合、非常時には利用できずとても残念だ。

同月三十一日。米国の大学図書館が協同運営するハティ・トラストという電子図書館がある。それぞれの参加校が電子化した所蔵書籍を協同で保存管理し共有する。その閲覧利用が拡大された。米国著作権法では政府刊行物に加えて、1925年以前の出版物は米国内公開で閲覧でき、1880年以前の出版物はグローバル公開で閲覧できる。著作権が有効の書籍電子版は閲覧不可であるが、コロナ禍の「予期せぬ、あるいは不随意の短期的混乱」における研究と教育のための「緊急一時的アクセス措置」で、オリジナルの紙版書籍を所有する参加校の学生・教職員は電子版閲覧が可能になった。ハティ・トラストのIT担当者が一千七百万冊にも及ぶ膨大なメタデータをAI処理して可能になった。日本語書籍は二十二万冊含まれている。これは日本語書籍を多く所蔵する大規模校の研究者ととって恩恵で感謝されている。

しかし、日本にしかない重要な資料はまだまだある。日本の図書館と学術・教



「みんなと共に」と書かれた看板。新型コロナに立ち向かう意味を込めている＝Brian Williams Bentley Historical Library 提供

育基盤が倒れば、海外の日本研究も倒れる。そして日本はこの学術基盤がハード面も人材面も非常に脆弱なのである。五月になって、日本でも遠隔授業が始まり、約二万人の大学教員がSNSでサポートグループを作り情報交換し奮闘している。その議論を見ると、技術面での個人の責任と負担が大きく、研究者自身も「できないのは研究者の資格なし」と背負い込んでいるようにも感じる。

先生と学生がこの困難から得た技術と経験を、学生のより良い教育と研究者を

支援する環境改善のために、図書館サービスを含めた学術基盤を強化する「場」に生かせないだろうか。

危機状況で世界は根こそぎひっくり返り、何もかもよく見えるようになった。経済格差はさらに深刻化し、セイフティネットは薄く一度に崩れ、多くの人が苦しんでいる。米国ではコロナ禍中に学生が卒業を迎え、学費ローンを抱え、就職前で失業手当も健康保険もなく、ホームレス寸前の若者も多くなる。

そんな中、ミシガン大学では二人の工学部学生が立ち上がった。「大学再開計画に学生も参加したい。学生も、住居・大学バス・食堂・課外活動・精神衛生等多様性・公平・包括を保証し、大学生活を安全に再開する企画に参加して、共に活動したい、教授に指導も仰ぎたい」と学部と学生課に提案した。大学も五月には学生支援を決定し、コロナ・キャンパス・チャレンジが立ち上がった。すでに六百人以上の学生が登録して、企画チームができようとしている。この力強さで、教職員も鼓舞されている。きつとこの学生たちは大学だけでなく、コロナ後の持続可能な新しい世界を発展させる中心になっ

1